

(肝属郡串良町上小原3978番地)

**位置と環境**

遺跡は、串良町上小原字吉ヶ崎に所在し、笠野原台地の南端に位置している。眼下には高山町との境界である肝属川とその肥沃な沖積平野が広がっている。町の中央部から南西に4.5kmで、標高約27mの舌状台地上にあり、東西に谷が入り込んでいる。

**調査の経緯**

遺跡は、県教育委員会により昭和51年から昭和52年にかけて、大隅地区埋蔵文化財分布調査で発見され、確認調査により集落遺跡であることが判明している。

その後、家畜糞尿処理施設の建設に伴い串良町教育委員会が調査主体となって、平成12年に確認調査や本調査(約180m<sup>2</sup>)を実施した。

**遺構と遺物**

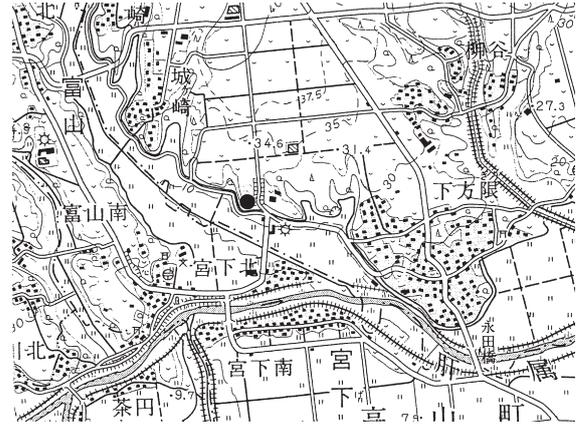
本遺跡は弥生時代中期・後期から古墳時代にかけての遺跡である。昭和52年の確認調査では、竪穴住居跡2軒が発見され、竪穴住居跡内の床面より、甕形土器の完形品4点・壺形土器の完形品4点・土器片・炭化木・磨製石斧3点・磨製石鏃5点などが整然とした状況で出土した。

特に、出土した完全な甕形土器や壺形土器は、当時の本県の弥生時代を解明するのに貴重な資料として注目された。

平成12年の調査では、弥生時代中期の竪穴住居跡1軒をはじめ、土坑(土器溜まり)1基が検出され、吉ヶ崎式土器、石鏃1点、敲石1点、磨石1点等の遺物が出土した。また、弥生時代後期では山ノ口式土器等の遺物が出土している。

古墳時代では竪穴状遺構2基、竪穴住居跡2軒、土坑2基(内土器溜まり1基)等の遺構を検出し、成川式土器の大型甕形土器をはじめ、ミニチュア土器等が出土した。

古墳時代の竪穴住居跡は、隅丸方形の竪穴住居跡で、ベッド状遺構を持つ。また、竪穴状遺構としたのは、土器片が密集して竪穴の中から発見された、その竪穴遺構の中に4層に渡って出土した。



第1図 吉ヶ崎遺跡の位置

**特徴**

昭和52年の確認調査で発見された竪穴住居跡2軒から炭化木が発見され、焼失家屋(2基)として確認されたのは希少であった。床面に密着していた吉ヶ崎式土器(完形品)は、山ノ口式土器に先行する弥生時代中期中頃のもので鹿児島県の弥生時代を解明する上で極めて貴重である。併せて、平成12年度の調査で出土した土器類も多量であり、弥生時代の資料として貴重である。

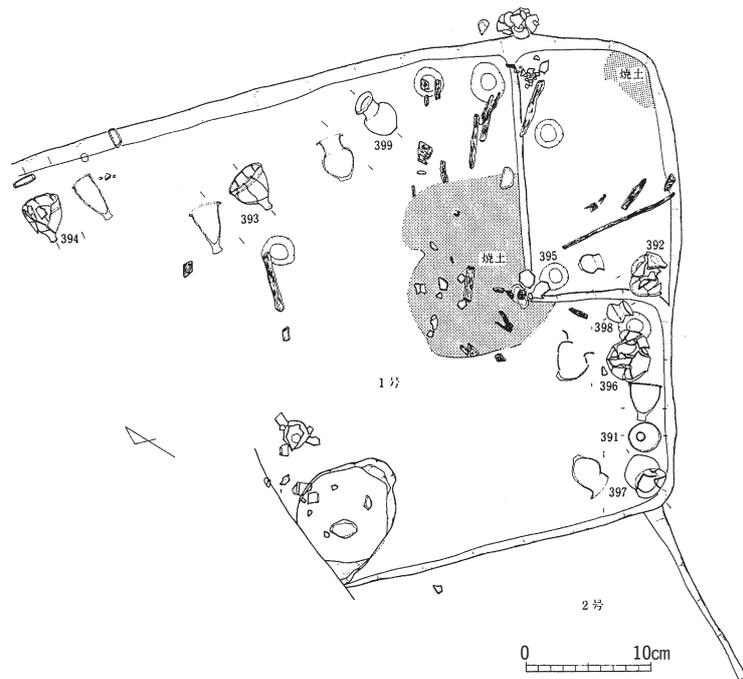
**資料の所在**

出土遺物は、昭和51年・52年度分は、鹿児島県立埋蔵文化財センターに保管され、一部は、鹿児島県上野原縄文の森展示館に展示されている。平成12年度調査分は、串良町教育委員会に保管されている。

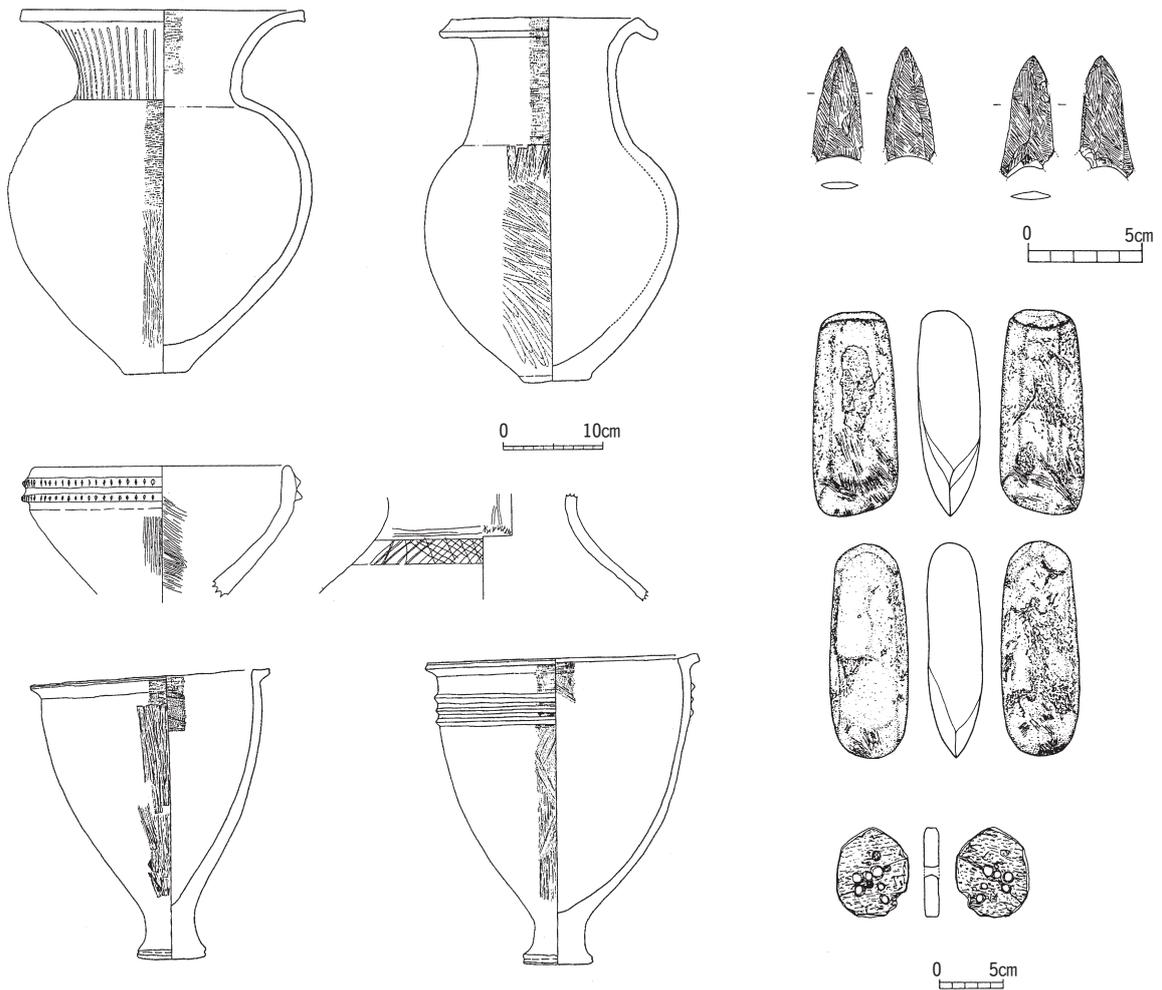
**参考文献**

鹿児島県教育委員会1983「大隅地区埋蔵文化財分布調査概報」『鹿児島県埋蔵文化財調査発掘報告書』25

(稲村博文)



第2図 吉ヶ崎遺跡竪穴住居跡平面図



第3図 竪穴住居跡出土遺物